



Title	饒舌・沈黙・含羞 : 「走れメロス」の語りづらさ
Author(s)	斎藤, 理生
Citation	月刊国語教育. 2008, 27(11), p. 32-35
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/56981
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka



齋藤理生

群馬大学教育学部講師

饒舌・沈黙・含羞——「走れメロス」の語りづらさ

—

「走れメロス」はさまざまな読み方ができる小説だ。「メロスが約束を守る物語」として読めることはもちろん、メロス以外の人物に注目して、「ディオニスが改心する物語」「セリヌンティウスが待ち続ける物語」などと読むこともでき、そうした読み方は物語世界を重層的に捉えるために有効だろう。

もつとも、それらの多様なアプローチを試みたところで、この小説は最終的には「友情」「信実」「愛と誠」といった〈主題〉にまとめられることが一般的だと思われる。だが、そのあまりにも明確に思われる〈主題〉は、読

む者に感動を与える一方で、何か片付かない思いを残してきた面があることも否定できない。その居心地の悪さは、この小説を論じること自体への抵抗（注1）や、〈主題〉から離れた読解（注2）につながるものでもあるだろう。本論では、「走れメロス」が実はそうした、〈主題〉に合わせた読後感を語りづらくさせる仕組みを内包していることを、メロスと言葉の関係に注目することで明らかにしたい。

二

「走れメロス」を朗読すると、メロスが実によくしゃべることにあらためて驚かされ

る。ディオニスとの対話、妹の婿との議論、走り続ける中での独白……。そうしたメロスの饒舌に対し、シラクスの「まちの様子」は「ひっそりしている」し、若い衆も老爺も質問に答えたがらない。それは、ディオニス王の治世が市民に沈黙を強いるものであったからだ。にもかかわらず正面から声高に王を批判し得たからこそ、メロスは勇者のように見える。

共に饒舌なディオニスとメロスは、「言え」「言うな」「だまれ」と発話の主導権を奪い合う。しかし、そのようにお互いが相手を論破することのみに執着しているがゆえに、彼らは意思疎通できない。しかも、メロスには売り言葉に買い言葉で口を滑らしてしまう傾向

があり、ディオニスに語っているうちに事をいつそう荒立ててしまふ(注3)。

「そうです。帰って来るのです。」メロスは必死で言い張った。「私は約束を守ります。私を、三日間だけ許して下さい。妹が、私の帰りを待っているのだ。そんなに私を信じられないならば、よろしい、この市にセリヌンティウスという石工がいます。私の無二の友人だ。あれを、人質としてここに置いて行こう。私が逃げてしまつて、三日目の日暮まで、ここに帰って来なかつたら、あの友人を絞め殺して下さい。たのむ、そうして下さい。」

常体と敬体が混在した台詞は、メロスの混乱を示している。混乱の中で彼は、自分が本気であることを王に認めさせたいがために友人を賭けの対象にしてしまふ。ところが王は、あえて身代わりまで用意したのは逃げようとしているからに違いない、と考える。思ひも寄らぬ解釈をされたメロスは、語れば語るほど王との溝が深まることによく気づき、「ものも言いたくなくなった」。こうしたメロスとディオニスの不毛な問答に対して、急遽呼び出されたセリヌンティウスは、メロスの説明に「無言で首肯き」、抱

きしめる。沈黙のまま、身をもつて親友を受け容れるセリヌンティウスの態度は、人質を引き受けた事実と共に、「口では、どんな清らかな事でも言える」と考え、人間をまず言葉から疑っていたディオニスの心を強く揺さぶつたはずである。

三

村に帰つたメロスが真つ先に会うのは妹と婿になる牧人である。注目すべきは、彼らが共に最初は饒舌なのだが、後には恥じらいながら沈黙することだ。はじめ妹は、疲労困憊で帰つてきた兄を「うるさく」問い詰める。

しかし結婚式のことを言い出されると「頬をあからめ」、沈黙し、婚礼の夜にも夢見心地で兄の言葉を聞くのみである。婿も、当初は式の日取りをめぐつてメロスと「夜明けまで議論をつづけ」るが、婚礼の夜には、義兄の言葉を照れながら、黙つて受け取るようになる。一方、メロスはこの間もよくしゃべる。

メロスの饒舌は走り出してからも止まらない。「えい、えいと大声挙げて自身を叱りながら走つた」。メロスは絶えず自分に語りかける。氾濫した川を見ては神に訴えかけ、小限の会話以外は「ものも言わず」に襲いかかつてくる山賊にも「さては、王の命令で、ここで私を待ち伏せしていたのだな」などと

声をかける。

むろんメロスは理由もなく饒舌になつていゝるのではない。故郷を離れること。氾濫した川に飛び込むこと。山賊に立ち向かうこと。いずれもメロスは困難な状況において饒舌になつてゐる。つまり言葉はメロスの活力源なのだ。ともすれば挫折しかねない窮地を、メロスは「きようは是非とも、あの王に、人の信実の存するところを見せてやろう」だの、「濁流にも負けぬ愛と誠の偉大な力を、いまこそ發揮して見せる」だの、「気の毒だが正義のためだ!」だのといった(大義名分)をガソリンにして乗り切るのである。

しかしやがて「自分を叱つてみるのだが、全身萎えて、もはや芋虫ほどにも前進かなわぬ」状態になる。メロスは帰り着かなかつた場合の王やセリヌンティウスの心情を想像し、追いこまれてゆく。この最大の危機において彼は殊に饒舌になる。

原典「人質」と比較しても、「走れメロス」のメロスは何かとよくしゃべるので、内面も明確になつたように見える。しかし、彼の言葉は常に内面を忠実に表現しているわけではない。メロスの言葉はその内容と共に、語られ方にも注意して読む必要がある。特に同じ言葉が反復される時には心情のゆれが認められる。「私は、今宵、殺される。殺される為に走るのだ。身代りの友を救う為に走るの

だ。王の奸佞邪智を打ち破る為に走るのだ。走らなければならぬ。そうして、私は殺される」という独白には、「走る」ことへの意欲の中に、「殺される」ことへの怖れが垣間見える。また、小説を通じて彼が「メロス」「お前」などと何度も自分を呼ぶことは、理想の自分を呼び起こし続けねば耐えられないほど追いこまれていたことを示している。逆に、挫折しかけた時の「ああ、もう、どうでもいい」「どうでも、いいのだ」「どうとも、勝手にするがよい」といった言葉も、本当にあきらめたからではなく、屈辱的な状況を合理化するために反復されていると見るべきだろう。言葉では動けなくなったメロスは、せめて動けない自分を言葉で肯定しようと懸命なのである。

四

メロスは泉の音を聞いて目を覚まし、水を飲んで走り出す。一般にこの場面は、渴きを癒やしたことによる体力の回復として理解されているように、ここではメロスが泉の音を聴いたことに注目したい。いつも一方的に語るばかりであったメロスが、偶然とはいえ耳をすましているからだ。

ひとたび聞く姿勢を示したメロスは、しだいに口数を減らす。フィロストラトスとの会

話を最後に、言葉を活力にすることさえやめる。並行して、王にどう思われるかといった対他意識もなくしてゆく。「メロスの頭は、からっぽだ。何一つ考えていない」。やがてメロスは咽を潰し、声を出せなくなる。精神的にも肉体的にも彼は言葉を失ってゆく。

フィロストラトスとの会話でメロスは、もはや友情のためというよりも、「なんだか、もっと恐ろしく大きいもの」のために、「わけのわからぬ大きな力」によって走っていると言う。従来これらの言葉はしばしば「神」だの「信実」だのを指していると言われてきた。しかし重要なことは、田島伸夫氏が指摘するように(注4)、ここで彼が「友情」「愛」「信実」といったそれまで持っていた言葉では表現できない何かに直面しているということだ。饒舌なメロスは、時にそのために困難を招きながらも、言葉を糧にし、活用することで生きてきた。そのような彼がここで語れない何かと対峙しているのである。以下、メロスは無言の行為で意志を表現するようになる。彼はとにかく走り通して約束の時間内に帰ってくる。刑場にたどりついた時には、友の足にすがりつくことで刑の執行を食い止める。

再会したメロスとセリヌティウスは、殴り合う前に言葉を交わしてはいる。しかし「私は、途中で一度、悪い夢を見た。君が若し私

を殴ってくれなかったら、私は君と抱擁する資格さえ無いのだ」というメロスの説明は、「ちから一ぱいに頬を殴れ」という過激な要求を満たすには、あまりに言葉足らずである。にもかかわらず、セリヌティウスはそれだけで「すべてを察し」、逆に自分をも殴らせる。彼らは多くを語りぬまま、殴打と抱擁という行為を介して理解し合う。

メロスは、「ありがとう、友よ」とセリヌティウスと同時に言ってから、物語の最後まで何も語らない。ディオニスもまた、そうしたメロスを群衆の背後から黙って見つめていた。そして和解の一言を告げるにあたって、「蒼白」だった王の顔には赤みがさす。この赤面は、王が温かい感情を取り戻したことを示している。加えて末尾では、夕暮れの中、メロスが緋のマントを捧げられ、赤面するといった具合に、世界が赤色で覆われる。

末尾の少女とメロスも無言である。しかし娘は捧げるという行為で意志を伝えようとしている。メロスは未だその意志を親友に説明してもらわなければ理解できない。しかしメロスが少女と沈黙し、赤面したまま関わり合っていることは、やはり饒舌から沈黙へ、そして赤面へと移行していた妹夫婦を思い出させ、二人の甘美な関係の始まりを予感させるものとなっている。

五

冒頭で、「走れメロス」は「友情」「信義」などの明確に思われる〈主題〉によって、感動と共に、ある種の抵抗をも覚えさせてきたことを述べた。近年は学校教育の現場でも、この小説を「くさい物語」だと拒否反応を示す生徒が少なくないという(注5)。ただ、そうした生徒のすべてが物語そのものに反発しているとは限るまい。反発は、読後感を述べるさいに感じられている可能性もあるからだ。つまり「走れメロス」に拒否反応を示す生徒たちの一部は、「友情」だの「信義」だのといった言葉を〈主題〉としてまとめることを「くさい」と感じているのではないか。なるほど、そこで結局は「くさい」という安直な言葉で処理してしまっている限り、生徒たちの拒否は批判として徹底していない。だが、饒舌だったメロスが次第に口数を減らすこと、終盤彼が言葉にし得ない何かのために走っていたこと、この小説のそうした部分に深く打たれた読者もまた、〈主題〉を「友情」だの「信義」だのといった言葉に収斂させることに「赤面」し、ためらってしまいうちがいない。読後感をせられしき〈キーワード〉に集約することに抗うこと自体は、沈黙と、含羞の赤に覆われた結末を迎える物語に

対してむしろ忠実なふるまいなのである。

もちろん、実際の国語の授業では、無言のまま小説をかみしめるだけで終えるわけにはいくまい。それでも、友情の賛美にとどまるのではなく、沈黙や含羞を手がかりに、言葉による意思疎通の特質を裏側から考える学習を構想できないだろうか。黙ったまま照れている姿というのは、意思疎通を避けているとして、日本人論や日本文化論で否定的に扱われがちである。しかし無言や含羞が饒舌以上に雄弁な状況もある。太宰治は「言葉」のいらぬ場所へのあこがれ(注6)を描いた小説「浦島さん」(『お伽草紙』筑摩書房、一九四五・一〇)の作者であり、また敗戦後、軍国主義から一転して人々が臆面もなく文化の重要性を語り出した時、「文化」には「ハニカミ」というルビを振るべきだという意見を友人と書簡で交わした人物でもあった(河盛好蔵宛、一九四六・四・三〇)。わかりやすく、響きのよい言葉をあえて慎むことでもじみ出るものがある。饒舌から沈黙と含羞に至るメロスの軌跡は、そうした言葉の逆説的な働きを教えてくれる。

[注]

1 山田晃氏は「走れメロス」(解釈と鑑賞)一九六〇・三)で、「走れメロス」は単純で、いわば爽快明朗な作品だとしながらも「正直な所、ほくにはこの作品を正面から論じる意欲が湧かな

い」と述べている。

2 山田有策氏は「〈主題〉なるものへの反逆」(月刊国語教育「東京法令出版、一九九〇・五)で、「主題」化という作業」の必要を踏まえつつ、文体の魅力など、そこから洩れてしまうものに目を向けることの重要性を説いている。

3 この点については、戸松泉氏「走る」ことの意味―太宰治「走れメロス」を読む―(『相模女子大学紀要』一九九六・三)に、メロスが「王の言葉に単純に反応する中でまたまたとんでもない事態を自ら引き起こすはめに陥っていく」という指摘がある。

4 「走れメロス」(中学二年)『国語教育・中学の文学』あゆみ出版、一九七六・四)。ただし本論では「愛と誠」「信義」といった言葉を、田島氏のように「はねとば」されるべき「虚偽、虚飾」とまでは考えていない。それらの言葉がメロスに力を与えたことも事実だからだ。

5 田近海一氏「読み」のレッスン 第八回「走れメロス」論(『月刊国語教育』東京法令出版、二〇〇〇・二)

6 東郷克美氏「お伽草紙」の桃源郷(『太宰治という物語』筑摩書房、二〇〇一・三)

さいとう・まさお

一九七五年生まれ。大阪大学大学院文学研究科修了。博士(文学)。太宰治の小説を、一見ささやかな言葉が果たしている機能や(笑い)に注目して読解する研究を続けている。